

汚れて95%も衰えた排気能力

一見すると、日常の清掃や環境整備も申し分なし、といえそうな介護施設の理事長に、「換気扇の総点検」を勧めた。「別に異常はありませんが...」と、いぶかしげな表情の理事長に強く迫り、施設管理部長に来てもらい、しびしびながら点検を始めることにした。

私は用意していた、棒の先に取りつけた風車を渡し、「まず排気孔テストから始めましょう」と伝え、あらゆる排気孔から排出される排気に風車をかざして歩いた。

「浴室もやるんですか?」と、首をかしげる担当者に構わず、風車をかざして歩いた。20個所の風車テストで、ひと区切りをつけた。予想以上に悪い結果が出たからだ。

この時は、首をかしげていた施設管理担当者も、緊張した表情に変わっていた。

「浴室やトイレの排気も、あんなに排気が弱いとは想像もできませんでした」

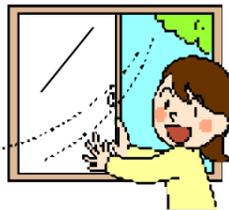
浴室やトイレの排気孔さえ、風車の回転は鈍く、弱い排気に回ったり回転が止んだりだった。そこで残り多くの排気孔テストを中止し、浴室の換気扇そのものを点検したのである。

なんと、換気扇の羽根全部に、べったりした汚れがへばりついているではないか。見ただけで気分さえ悪くなるほどだ。羽根と羽根の間はベタついた汚れで塞がれ、だれが見ても、これでは満足な排気ができるわけがない...と、わかるほどであった。

「排気機能は、95%ほどしかありません」という私の説明に、反論はなかった。

「浴室やトイレの換気扇まで、あんなに汚れるとは、思ってもみませんでした」

理事長は翌日、「換気扇の総点検をやれ」と指示をしたそうだ。翌月訪ねた私に理事長は、「私もうっかりでしたが、調べてみたら



換気扇を過信すると空気汚染の元凶になります

経営コンサルタント 一見道夫



建築図面の換気扇の記号です。

5年間ほど、換気扇の掃除をしてなかったんですね。とはいえ、入居者の居室なんかほとんど換気不全で、よく調べてみたら換気の逆流さえありました。点検清掃の盲点になっていました。反省しています...」

空気をかき回すだけの換気扇を一掃せよ

ところで自宅の換気扇、そして会社の換気扇。何年前に掃除しましたか?。

もし5、6年間も掃除した憶えがなければ、即刻、「排気孔の風車当て総点検」をすべきでしょう。予想を上回る塵埃飛び交う空気こそ"目に見えぬ敵"と思うべきでしょう。

多くの人は、日頃から思っている。「浴室の換気扇なんか、汚れるはずがない」と。

ところがどっこい、汚れるはずのない浴室だって、「10年も掃除しなければ、換気扇の羽根は汚れて、回転力はヨタヨタ」なのである。10年なんて、すぐに過ぎてしまう。

浴室の換気扇は10年間使うばかりだった、という家庭や職場はざらにあるのが現実である。まず、そういう所の排気孔に風車を当ててみれば、啞然とする現実に直面するはずである。

最近では、新型ウイルスの影響もあり、空気清浄機が売れているというが、清浄機を置く前にまず、換気扇の点検清掃をすべきであろう。

お年寄りの肺結果の多い老人ホームの場合、想像ではあるが、換気扇がろくに機能していないのではなかろうか。肺結核の大敵は汚れた空気、というのは昔からの常識だから。

換気扇に対する過信が、かえって環境空間の汚濁を招いている、と言っても過言ではない。

しかし換気しない換気扇は、汚れた空気を流すのではなく、汚れた空気をかき回し四散させるだけに終わるのである。

さあ、あなたのお宅。そしてあなたの職場。明日と言わず即刻、《換気扇の点検清掃キャンペーン》をおやりになる必要があるかも。

ありがとうの思い出 - 19

「ありがとうの思い出 - 19」の文章は縦書きで、故人の思い出を綴っている。内容は故人の生前の出来事や、家族との思い出、そして故人の性格や生き様について語られている。

= 不動産と災害のリスク = 万-の水害に備えた土嚢の效能... 不動産コーディネーター 豊田泰幸

増水し始めるとその早さに驚き...

台風シーズンになると全国から風水害の状況がテレビに映し出されます。雨が破れたような大雨が続いたときは山間地や崖地では、川が増水して道路をまともに歩けなくなってしまふ前に、その場を離れて安全な場所に避難することが最優先ではないでしょうか。

昭和34年(1959年)の伊勢湾台風は、最大風速45.7m、最高潮位4mにも達したといわれ海岸堤防の超える高潮による被害と河川の堤防の決壊による被害は名古屋周辺のみならず、台風が本州を縦断により東京にも多くの被害をもたらしました。

異常気象による豪雨や兩台風に被災した経験がない人には分かりにくいですが、山間地の鉄砲水や土石流ではなくても、ひとたび都会の河川が氾濫すると水は驚くほどの早さで水位を上げてゆくのです。

河川近くの住宅は、蛇行する河川の外側か内側か、河川の土手の高さに比して住居と満水の時の水位の関係はどのような状態であるかを確認

しておくようにし、交通手段が遮断される場合もあるので平時から知っておくべきでしょう。増水していた河川が氾濫し道路から住宅街、商店街に流入し始めると、その早さは驚くほど早く、氾濫する前から家屋への流入を防ぐための対応をしておかなければほとんど間に合いません。

土嚢の活用で家屋を守る...

土嚢は砂を詰める形式や、ホースで水を詰める方式のものなど利用方法によって選択し、常備しておいてはかがでしよう。土や砂は、バラバラでは水に溶けて流れてしまいますが、土嚢に入ると粒子が摩擦で強度を増し張力が発生するので圧力を加えるほど強固なものになります。

水の流入を防ぐためには積み上げた土嚢をしっかりと踏み固めることがポイントです。

最近では、強化ビニール製の水嚢というものがあ、ホースで水道水を注入して出来る製品や、水に浸けると水を吸い込んで出来る水嚢などがありますので、それぞれの特製を確認して活用すると良いでしょう。土嚢や水嚢の活用によって、家屋

の土台の中に水が入り込まない工夫ができるだけでもメンテナンス上、かなり有効なことだと考えられます。水は方円の器に従うことを忘れずに...

「水が溢れ始めたら水位が上がるのはあつと言う間だから...」と、川の水が氾濫しないように必死になって土嚢を積み上げるのです。水は、大木でも浮き上がらせて流してしましますし、土や砂はいとも簡単に水に溶け込んで流れてしまします。家屋の中に流れ込んだ水は隅々まで容赦なく...土や砂や汚物を運び込んできますので排斥や消毒が必要になってきます。

縁の下、土間、床下収納、あらゆる処に水は流れ込んで来た水は、土砂や汚物を残して引いてゆくのですから、水が入り込まないようにすることが如何に大切かが分かります。

コンクリートで固められた町には水路が走り、深いコンクリートの川底をみせた河川がありますが、大自然の摂理を超えるものではありません。住宅、工場、事務所、地下駐車場、地下商店街など、すべてが災害に備えた建物なのではないでしょうか。

停電になったら排水ポンプは作動するのでしょうか? 都会でも「河川の水は必ず氾濫する」ことを知っていれば、万-のリスクにも備えることが出来るはずですよ。

World Now

= 国民の期待が政策に反映されているか? =



今月も前月に引き続き「Getting off Track」をご紹介したいと思います。この本では、昨年米国で起こった金融危機は政策の失態により深刻化および長期化したと説明されています。その政策のなかには、日本にも当てはまるのではないかと考えることがあるので、そのうちの二点をご紹介したいと思います。

一点目は、今年日本で支給された定額給付金に類似する問題です。米国では、景気刺激策の一環として、個人消費を促し経済を活性化させる目的で、1000億ドルを超える予算を組み、国民に現金が送られました。

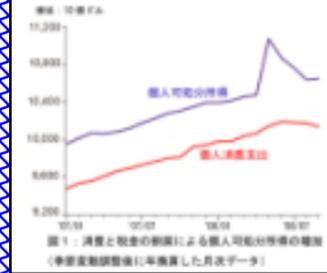


図1: 消費増税と税金の削減による個人可処分所得の増減 (単位: 10億ドル) (資料: 国税庁発表の「平成19年国勢調査」)

二点目は、図2: 金融危機悪化に伴うイベントにあるLibor-OIS (リボル - オーバーナイト・インデックス・スワップ) スプレッドに着目して、金融市場が急激に不安定になった真の原因を探ってみようというものです。

Libor-OISスプレッドとは、信用収縮懸念が高まりを見せている時には、拡大する傾向があります。つまり、この数値が高くなればなるほど、市場が不安定になっているといえます。今

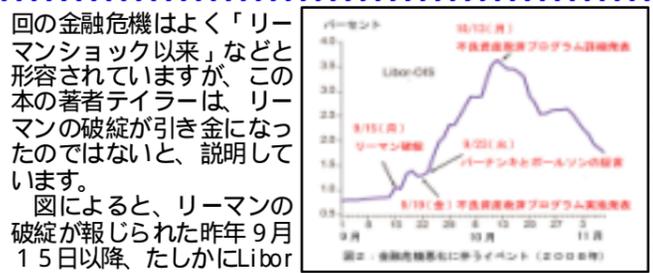


図2: 金融危機悪化に伴うイベント (単位: 百分点)

回の金融危機はよく「リーマンショック以来」などと形容されていますが、この本の著者テイラーは、リーマンの破綻が引き金になったのではないと、説明しています。図によると、リーマンの破綻が報じられた昨年9月15日以降、たしかにLibor-OISは上昇しました。

しかし、不良資産救済プログラム(TARP)が講じられる旨が9月19日に発表され、一旦安定を見せました。重要なのは、この時点では、不良資産救済プログラムの規模も概略も発表されていなかった点です。その直後、9月23日に連邦準備制度理事会のベン・バーナンキ議長とヘンリー・ポールソン財務長官が議会で不良資産救済プログラムについて証言しました。

7000億ドル規模になると発言しましたが、監督体制や利用制限についての具体的な話はなく、厳しい批判を受ける結果となりました。結局、この証言で求められていたのは、金融危機に対する対策の具体性および透明性だったのではないのでしょうか。どれだけ金融危機が深刻でも、それに対処できるだけの不良資産救済プログラムが発表されていけば、人々の衝撃は和らげられ、不安が増幅することもなかったのだと著者は言います。